

第六章 ミナス方面への米作

笠戸丸以来ブラジル食（フェジョン豆とマンジオカ粉）に馴染めなかった日本移民が自分達の主食用の米をコーヒー樹の間に僅かに蒔いたのだらうと推測される。どの耕地でも自家消費用の食糧作物を栽培するために、コロノには無償で土地を使わせてくれた。

日本移民入耕当初の頃は、米はむしろ不足する中、収穫するものなら高値で取り引きされた。

リオ・グランデ沿岸の米作の始まりは、第1回移民の広島県人臼井介仁（うすいかにと）がコーヒー農場通訳として第3回巖島丸移民を引き連れて、イガラパーバ駅ウニオン耕地へ入ったことによる。この日本人家族等がコロノ契約を終えた後に米作を始め、後1920年頃まで盛んだったミナス州境地帯に於ける日本人米作の草分けとなる。（回想録）

又この頃コーヒー樹の間に米を植えて食糧としていたのは、日本人コロノの池岡鶴松であった。池岡はコーヒー畑除草期の間作として播種した僅かばかりの稲に思いを打ち込んで、見事な稔りにしており、滝沢はすっかり魅せられる。滝沢はカニンデス駅の富岡を訪ね、同地で米作を試させたのが1915年。滝沢、富岡といった若手が中心に成り日本人仲間と呼び掛け、まとまった土地を借り、そして1916年にグランデ川に近いメランシア耕地で集団米作を始めた。

収穫した米価は1俵20ミル・レーイス（60キロ入）生産費を差し引きその利益は予想外に大きかった。こうしてモジアナ線コーヒー耕地契約者は契約終了後コロノ生活を嫌って米作へと転向するものであった。（「移民40年史」106ページ）

1918年頃この地帯での米作専門者は97家族、コーヒー園内間作での米作をやるもの89家族。その生産量は2万6千余俵。次年の1919年の下旬には、2百家族の新来者を迎え家族数400戸、米作地3千6百余HA. 収穫高10万俵にたった。ただ土地所有者は殆んどなく分益農か、借地農（「移民の生活の歴史」367ページ）であり、この地方でも低湿地マラリアの問題はあったが収益を求める方が強かった。（「モジアナの土に生きる」）



籾を収穫する日本移民 1925年頃